

俺様同僚は婚約者

(……悔しい……)

力のこもった右手が、愛用のタブレットをミシッと軋ませる。しかしそれは一瞬のこと。平静を装うべく、浅木百合子は自分の表情筋に笑顔を作るように命じた。そして、隣にいる男に顔を向ける。

「さすがだわ、佐藤チーフ。今回は完敗。本当にいい案ね」

今回は、のどころだけ力いっぱい強調してやる。すると、佐藤は余裕綽々の笑みを返してきた。「ハハハ。まー、浅木チーフの案もよかったよ。俺のがもつとよかっただけで」

「……」

目鼻立ちの整ったイケ男が、自信に満ちあふれた爽やかな笑顔を見せれば、普通の女なら惹かれるだろう。だが百合子は違う。正確には、この佐藤真に対しての百合子の反応は、おおよその他の女とは違うものだった。

(なあと自画自賛してんのよ！ このタコ！)

笑みを浮かべつつも、こめかみにピシッと青筋が立つ。なにせ百合子は、この男にたった今ブレ

ゼンで負け、仕事を奪われたばかりなのだから。

百合子が勤めているのは全国に支店がある広告代理店、ライズイノベーションプラスの大阪支店だ。そのイベント企画部門に籍を置いている。イベントのスポンサー企業の獲得や、集客プロモーション、PR、企画運営などが主な仕事だ。

今回の案件は、大手外食企業が手がける高級イタリアンレストランの店舗プロデュースと、新規オープンキャンペーンのイベント企画だった。しかも、このレストランは海外でも名高いイタリア人シェフ、アドネ・オルランド監修ということで、クライアントも気合いの入りが違う。

そこで、企画部の中でもトップクラスの成績を誇る百合子と佐藤がそれぞれ企画を出し合い、プレゼンをし、どちらがよいかクライアントに選んでもらうというコンペが開催されたのだ。

このプレゼンに、百合子はかなり自信があった。

まずは、入念なりサーチの上に店舗候補地を選定。オープン前には、招待客のみに事前試食会を企画して特別感を演出。店の内装にも趣向を凝らした。もちろん、メディアへの露出枠も確保済みである。

その、勝ちを取りに行ったプレゼンで負けたとあつては悔しさも一入。

（この会社は伸び率高いし、優良企業だから絶対顧客に欲しかったのに！ ライブクッキングでつなによ！ ええ、そんな発想もツテも私にはありませんよ！ 悔しい、悔しい、悔しいっ！）

しかも負けた相手が佐藤。

佐藤と百合子は同期で、もう七年の付き合いになる。

チーフに昇進したのも同じ日とあつて、今まで何度比べられて、競い合ってきたかわからない。いわゆる、ライバルという存在だ。

企画部のトップである佐藤と肩を並べていられる女性は百合子くらいなものだが、二人の間に色っぽい話は皆無。

彼は身長が高く、顔もいい。それに面倒見のいいタチだから、かなり女にモテる。

それだけではない。彼は俗に言う人誑しというやつで、普段は軽薄なノリでいつも笑いの中心にいるくせに、決めるところはバシッと決めるものだから、頼りがいがあり、老若男女問わず人気なのだ。

だが百合子に言わせれば、自信家なところが鼻に付く。

（あんにやる〜いつたいたいツテってなんなのよ！ 相手はイタリア人よ!? そんなの反則よ！）

実は佐藤が出した案は、百合子のものでそう大差はなかった。ただ決定的に違ったのが、アドネ・オルランドが調理しているシーンそのものを公開するという点だ。

アドネシェフは調理場にメディアを入れることを極端に嫌う。レシピを盗まれることを危惧しているためと噂されているが、その彼によるライブクッキングを試食会で実施するというのだ。しかもそれをメディアに取材させるなんて、インパクトが違う。

問題はアドネシェフがOKしてくれるかなのだが、佐藤は己のツテを使ってシェフに既に確約をもらっているというのだから、はじめから百合子に勝ち目はなかったわけだ。

佐藤は直感とセンスだけで仕事をしている節がある。「自由な発想と行動力」は、百合子に言わ

せれば、ただの「気まぐれ」だ。

今回だって、アドネ・オルランドにライブクッキングをさせたらウケるだろうという彼の直感のもと、シエフにぎり押ししたに違いない。そうに決まっている。

その証拠に、店舗の選定地なんかは、百合子が挙げた場所のほうがずっといい。それなのに！（なかが『浅木チーフの案もよかったよ』よ！ そんなこと、微塵も思っていないくせに！ 私にもアドネ・オルランドにツテがあったら……）

地団駄を踏みたい気持ちを抱えていても、ここは会社だ。まわりの目もあって笑顔は崩せない。プレゼンのために来社していたクライアントと一緒にオフィスビルの入り口へ行き、完璧なビジネススマイルで見送る。そして、さてオフィスに戻ろうかというとき、隣にいた佐藤がニヤリと不敵な笑みを浮かべて言った。

「これで俺の十勝だな」

「は？」

突然そんなことを言われて、思わず素で返してしまう。意味がわからない。

眉を顰める百合子を、佐藤は鼻で笑った。

十センチのハイヒールを履いた百合子よりも、佐藤のほうがまだ背が高い。それが見下されているようで、または百合子のカンに障った。

「俺とおまえがチーフになってから二年になるが、これで俺の十勝六敗だ」

佐藤の言う通り、確かにチーフになって今年で二年だ。彼は二年の間、どちらの企画が多く採

用されたか、ずっと記録を取っていたのか。負けず嫌いにもほどがある。だが、負けず嫌いなら百合子だって相当だ。

（私のほうが四回も多く負けてるっていうの？ 悔しいっ！ 本当かどうかあとで確認しなきゃ）

そんな腹の内を隠して、百合子は佐藤に負けじとツンと顎を上げた。ハイブランドのタイトスカートから覗く脚を肩幅まで開き、鮮やかに口紅を塗った唇に指先を当てる。そうして挑発的な視線で「クスッ」と笑ってやった。

「あらあ、私、エースと名高い佐藤チーフ相手に六勝もしていたの？ 知らなかったあーうふふ」

自分の勝ち星を強調してやると、勝利の余韻に水をさされた佐藤の笑みがやや険悪になった。

「は……。先に十勝したのは俺だ。おまえは十敗な。十敗」

（言ったわねえ〜？）

底冷えするような木枯らしが吹く中、会社の玄関先で企画部のトップチーフが二人、笑顔で睨み合っている様は、なかなかの迫力だ。さしずめ、ハブとマンガース。黒豹と女豹の一触即発状態に、外回りから戻ってきた営業がギョツとした面持ちでそそくさと横を通り過ぎていく。

火花を散らす二人を止める者が誰もいないのは、触らぬ神に祟りなしというのを、皆が既に実感しているからだろう。

睨み合いの末に、先に踵を返したのは百合子のほうだった。

十敗だろうが、六勝だろうが、たかだか星四つの違いだ。たいしたことはない。あと四つ、自分が白星を挙げてやればいいだけの話。それでイーブンになる。

(次こそは私が勝つ。それで四連勝するんだから)

「フン。勝ち負けなんてどうでもいいわ」

思っていることと真逆のことを口にして、ヒールをカツカツと鳴らしながらエレベーターに向かう。同時に乗り込んできた佐藤が、イベント企画部のある五階のボタンを押した。

「なんか祝ってくれたっていいだろ。十勝なんだからさー」

ヘラヘラとした調子で言われて癩しやくに障さわる。

百合子は面倒臭いのを隠しもせずに、適当に返した。

「あー、おめでどう、おめでどう。なにか欲しいものがあるなら言いなさいよ」

高いものは却下よと付け加える。でも、アドネ・オルランドとアポを取ったツテとやらを聞き出すために、昼食くらいは奢おごってもいいかと考えていると、佐藤が隣で目を細めて笑っていた。

それがなんとも言えず楽しそうで――

「まあ、そのうちになんか頼むわ」

(そのうち?)

今すぐなにか欲しいものがあるからこそその発言だと思ったのだが、そうではないのか。なにかよからぬことを企たくらんでいるのではないかと邪推じやくすいしたくなる。

そんなとき、エレベーターが五階に止まった。

「よし！ 約束取り付けたし、仕事の続きするかな！」

気合いを入れた佐藤が、オーダーメイドスーツのジャケットを羽織はり直し、やや茶色味がかつた

短髪を掻き上げる。それに張り合うように、百合子もバレッタでハーフアップにした自分の長い黒髪をふわりと梳すいた。

(見てなさいよ、佐藤お……次は私が勝つんだから！)

自分が十勝した暁あけには、佐藤に豪華ごうかなランチを奢おごらせてやる。



ブーブーブーブー。

仕事を終えた百合子が一人暮らしをしている自宅マンションの鍵を開けていると、スマートフォンがバイブレーションで着信を告げた。画面を見れば母親からだ。

今日は週の半ば。週末でもないのに電話してくるなんて、なにか急用かもしれない。

「はい？ もしもし？」

「ああ、もしもし、百合子？ 今、家？」

「今帰ってきたところよ」

電話の向こうで母親の声が呆れたものになる。

「いまあ!? あんた今十時よ、じゅーじ！ こんな時間まで働かなきゃなんないもんなのかねえ」

(はあ……)

目の前にいなくても、苦虫を噛み潰つぶしたような母親の顔がありありと浮かぶ。

男が外で稼ぎ、女が家を守る。そんな昭和の価値観で生まれ育ち、それを実践してきた専業主婦の彼女には、平成の世の男女平等がいまいちピンときていない。

百合子が大手企業に就職を決めたときなんかは、大喜びで「これがこれからの女よね」と言っていたのだが……。同じ関西に住んでいながらも、百合子が正月以外に帰ってこないものだから、今の仕事をあまりよく思っていないのだ。

「今日遅くなったのはたまたまよ、たまたま……」

「そんなこと言って！ この間も遅かったじゃない。あんたもう二十九よ、二十九！ ってか次三十よ！ いい年なんだから、仕事ばっかりしてないで、もっとちゃんとこれからのこと考えて、いい加減結婚しなさい」

これである。

「もうそろそろ」が、「いい加減」に変わったのはいつからだろう？

母親の望みは、娘が仕事でキャリアを積むことではなく、仕事を通していい婿殿を捕まえてくることだったようだ。そのために娘はいい会社に入ったのだと思っていた節さえある。

(そんなこと言われたって……仕事が楽しいんだからしょうがないじゃないの)

これをそのまま言うと、母親のお小言がパワーアップしてしまうことは経験上わかっている。だから、話を適当に聞き流しながら、百合子は部屋に入ってバッグを置いた。そしてコートをベッドの端に投げ、腰掛ける。

仕事が楽しすぎて、入社当時軽く付き合った男とは数ヶ月で破局した。以来、百合子は一人だ。

仕事にのめり込む百合子を理解してくれる男性なんていない。チーフの肩書きがついてからは、同性からも微妙に距離を置かれているくらいだ。当然、合コンの誘いも皆無。

「うーん、まあ、相手がいらないからね。で、なあに？ なにか用事があつたんでしよう？」

「そうなのよ！」

突然張り切った声を上げた母親に、なんだかいやな予感がする。しかし、一応「なに？」と聞いてみた。

「あんた、今週末は休み？」

百合子の休みはかなり不規則だ。イベントは大抵週末に集中するし、その準備もあるから土曜が休みになることはまずない。日曜は大抵の取引先が休みになるためイベント当日以外は休むが、繁忙期になると連勤もザラだ。

一応、二週間に一度は平日に休みを取れることになっているが、チーフという立場上なかなか難しい。その代わり、給料はすこぶるいいのだ。

「うん。今週の日曜は休み」

百合子が素直に答えると、母親の声が更に明るくなった。

「よかった！ ならあんた、お見合いしなさい」

「へ？」

呆けた声が出て、ジャケットを脱ぎ去りとしていた手が止まる。二、三度パチパチと瞬きをした。言葉が続かない百合子に、母親は親切丁寧に復唱する。

「お見合いよ。おーみーあーい。ったく、聞こえなかったの？」  
(聞こえてるわよ……)

聞こえちゃいるが、それを自分に勧められたことが理解できなかっただけだ。

「なんで急にお見合いなのよ……」

「急じゃないわよ。前から何度も言ってたじゃないの。『いつまでもいい人が見つからなかったら、お見合いでもしなさい』って」

(そういえば、そうだったような……)

記憶にはあるが、まさか本気だとは思っていなかった。

百合子は頭を押さえつつ、抗議の声を上げる。

「だからってお見合いって——」

「実はもう、お相手は決まってるのよ」

「はあ!? なに、勝手に決めてるの!？」

驚いて、ベッドから立ち上がらんとする勢いで叫んだ。が、母親はまったく意に介さず、むしろ嬉々とした調子で続ける。

「それがお相手がいい人なのよお。ナントカっていう大手グループ会社の社長の息子さんでね、なんと次期社長なのよお」

「次期社長?」

お見合いには乗り気でない百合子だが、さすがに次期社長と聞けばピクリと眉が動いた。

会社名がわからないのが決め手に欠けるが、大手と言うからはそれなのところなのだろう。

しかしまたどうして、自分なんかのところにそんな人との見合い話が舞い込んできたのか。大手グループ会社の次期社長が見合いをするのはまあ普通かもしれないが、百合子の家はごくごく普通の一般家庭だ。そんな女と見合いをして得るものがあるとは思えない。相手を間違えているのではないか。

「その話大丈夫なの?」

百合子が問いただしても、「大丈夫、大丈夫」と母親の返事は軽い。余計に不安が募る。

「あなた、覚えてるかしら。お父さんの伯母さんの、千春さん。あの人の旦那さんのお兄さんの娘さんが、かな〜りいいところに嫁いでね。旦那さんがナントカって会社の社長さんなんだって。その繋がりで紹介してもらったのよお」

「いやいや、千春伯母さんはわかるけど、千春伯母さんの旦那さんのお兄さんの娘さんの旦那さんって、その人完璧に他人だよね?」

しかもまたナントカという会社……

(ソコが肝心なんじゃないの? ったく……おかーさんったら……)

今度は別の意味で百合子が頭を抱えていると、母親は念を押すように言ってきた。

「あんたねえ、いつまでも若くないのよ? 仕事が好きだって、そんなこと言ってもいざってときに仕事はあんたを助けちゃくれないのよ? 風邪ひいて寝込んだときに仕事がお粥作って看病してくれるっていうの? 違うでしょう。お母さんもお父さんも、ずっと一人でいるあんたが心配なの

よ。私たちだっけいつかは思うように動けなくなるんだから。お父さんなんか、最近膝が痛い、腰が痛いって言ってるのよ？ 娘の幸せを見届けたいと思うのは当たり前でしょう？」

「……おかーさん……」

親心なんだろう。そこまで自分の生き方が親に心配を掛けていたかと思うと、申し訳ない気持ちになって、少ししんみりしてしまふ。

親孝行のためにも、このお見合いを受けたほうがいいのかもしれない……。そんなふうには百合子が思いかけたそのとき――

「あなたの小学生のときの同級生だった井上歩美ちゃん。お腹大きくなって実家に帰ってきたのよ。お母さんと一緒のところに来てね。ちよつと立ち話したんだけど、もうじき生まれるんですって。一人目かと思ったら、もう二人目なんですってよ！ あんたもいい加減――」

「ちよつと、おかーさん!？」

本気でしんみりしていたのに、突然の孫の催促に思わず大きな声が出る。

「そんなこと、人と比べることじゃないでしょう!？」

「あんたはそう言うけど、『百合子ちゃんは結婚したの?』って聞かれたときの私の身にもなりなさいよ! 『今は仕事が楽しいみたいで』って答えたら、『いつかいい人が見つかるわよ』って言われたのよ!? 悔しいじゃないのよ! 私だって孫抱きたいわよ! あんた、早くしないと女として枯れるわよ!？」

その「いい人」は、未だに百合子のもとにあらわれていない。なら私が見つけてやろうじゃない

か――。そう母親が息巻いた結果、親戚と呼ぶには遠すぎる親戚から、このお見合い話をゲットしてきたわけか。

自分の負けず嫌いは母親からの遺伝だ。絶対そうに違いない――とぐつたりとうな垂れる百合子に、母親は鋭く言い放った。

「とにかく! もうお相手とは話がついてるんだから。あんまり堅苦しいのはよくないだろうってことで、間に人を入れずにやることにしたのよ。まずは二人で会って食事でもしてみなさい。今週の日曜、十一時から! 場所はシュートランホテルの展望レストランよ。他の予定なんか全部キャンセルしなさい! これ以上の予定なんかないんだからね! お相手の釣書、メールで送るから!」

「あ、ちよ、おか――」

百合子が抗議の声を上げる前に、ブチッと通話が切られてしまった。

「あー、もうっ!」

スマートフォンを持ったままどつとベッドに倒れ込み、百合子は「はあ」と大きなため息をついた。

仕事で疲れて帰ってきたのに、今ので更に疲れてしまった。

「週末の予定なんか初めつからないわよ……」

キャンセルする予定があったほうが、まだよかったかもしれない。不貞腐れたように呟いて、目を瞑る。

女が子供を生めるタイムリミットなんて、頭では充分わかっている。テレビでも雑誌でも、いつ



からか盛んに取り上げられるようになったその話題が、無理やり視界に入って自己主張してくるたびに、漠然とした焦りのようなものが湧き起る。そんな体験を、もう何度したことだろう。でも、それを誰かに言ったことはない。なぜなら百合子の同級生の半数以上は既に結婚していて、子供がいる人も多いからだ。そんな彼女たちとは、まるで道が違えたように話が合わない。

学生時代に、勉強や好きなアイドルのことを熱心に話した彼女たちの今の話題は、旦那や子供のこと。働いている人もいるが、パートだったり、フレックスだったりで、フルタイムの正社員は少ない。それにそもそも、フルタイムの正社員をしている友人となると、今度は会って話すような時間がない。

人生人それぞれで、勝ち負けなどありはしない。

今の仕事はとても楽しくて、やりがいもある。日々充実して満足なはずなのに、なぜだかふとした瞬間に焦るのだ。この漠然とした焦りは、百合子と同じ立場に置かれている全国の女性たちが感じるものではないだろうか。

百合子に兄弟はいない。だから、孫を抱きたいという両親の希望を叶えることができるのは、百合子だけだ。

子供は嫌いじゃない。いつかは欲しい。しかし、結婚したい相手がいらない。

仕事を楽ししいからと「今」ばかりを見て、「今」をこなしてきた結果がこの「今」だ。

これはどんな未来に続いているというのだろうか？ 孤独な老後が透けて見えるようじゃないか。職場で自分が、密かにお局様呼ばわりされていることも知っている。

両親からの期待という名のプレッシャーと、世間の目と、女としての自分。

このまま一人で歳を取ることを怖いと思うならば、なにかを選択しなくてはいけない。しかも、早急に。きつと「今」自分は分岐点にいるのだ。

恋愛なんて慣れてないのだから、そう考えたらお見合いのほうが効率がいい可能性はある。

(お見合いして、結婚したら、一人じゃなくなる……けど……)

「はあ……」

百合子が再び大きなため息をついたとき、手の中でスマートフォンが震えた。洗面を作った画面を見ると、母親からのメールである。言っていたお相手の釣書だ。

「必ず行きなさいよ！」と書かれたそのメールの添付画像を開くと、透かしの入った和紙に印刷された文字が並んでいる。

お見合いなのだから、本人のプロフィールや家族構成を書いた釣書と共に、普通は顔写真があるようなものだ。だが、メールにはそれがない。

母親が送り忘れたのかもしれないとも考えたが、たぶんそれはないだろう。あれだけ張り切っていた母親が相手の顔を知っていたら、イケメンだの、男らしいだの、なんらかのコメントを残すはずである。最初から写真はないと考えるのが妥当だ。

(お見合いに写真がないなんて……。これは相手の見た目は期待できないかもしれないわね)

次期社長という肩書きを覆すほどのなにか重大なマイナスポイントが彼にはあって、百合子のような一般家庭の三十路手前の女に見合いの話が回ってきたのかもしれない。そう思うと、憂鬱に

憂鬱が重なって、またもやため息が出た。

「はあ……知らない人と一対一でなにを話せばいいのよ」

気乗りするどころか、行きたくない気持ちが増速しただけなのだが、とりあえず相手のプロフィールを確認しようと釣書を拡大してみた。

目に入ってきた見合い相手の名前に、思わず「ん？」と声が出る。

「佐藤……真……」

今日百合子から仕事を奪っていった同僚の佐藤真の、やたらと自信満々な顔が脳裏を掠める。しかし、百合子は小さく息を吐いて画面をスクロールさせた。

(佐藤真なんて、よくある名前よね)

よくある苗字ランキングトップの苗字に、男性にありがちな名前の組み合わせだ。こう言ってはなんだが、全国に一人はいそうである。

そしてなにより、同僚の彼が社長の息子でいるはずがない。プラス、彼がお見合いなんかするととても思えなかった。

あの男は、顔もいいし業績もいいから、社内外問わずかなり女性に人気があるのだ。お見合いをする必要性はどこにもない。

単なる同姓同名の別人だろう。そう結論付けて釣書を読んでいくと、佐藤真なる人物の父親が社長を務めている会社は、ライズイノベーションプラス。なんと百合子が働いている広告代理店だった。確かに、社長の苗字は佐藤である。

(おかしかったら……)

お相手の父親が経営する会社名をナントカだなんて言ったのは、母親があえて誤魔化したからだろう。自分が勤める会社の社長の息子と見合いだなんて、百合子がいやがると思ったのだ。

だまし討ちされた気分だが、文句を言えば「だったら自分で相手を見つけてさっさと結婚しろ」と、お説教されるのが目に見えている。そうなれば不利になるのは百合子のほうだ。ここは諦めるしかないのか……

会社の業績は悪くない。

百合子が働いているのは大阪支店で、社長とは直接会って話したこともなければ、近くで見たこともない。それでも、聞こえてくる社長の人柄は立派なもので、昔から同族経営の会社だが、ワンマン経営でもないし、風通しもいい。

どんなに忙しくても、百合子が楽しく仕事をできているのは、正しい評価と、正しい報酬が約束されているからだ。その方針を打ち出しているのが、この佐藤社長である。

しかし、息子の話はまったく聞いたことがない。というか、息子がいることすら知らなかった。

(私の釣書も向こうに行ってるだろうし、社員だっことはもう知られてるわよね……)

これでは間違ってもドタキャンなんかできない。そんなことをすれば、社長からの心証が最悪になるじゃないか。

縁談がうまくまとまらなかったとしても、せめて心証くらいはよくしておかないと。

なあに、向こうだって、自分のところのイチ社員と結婚なんて、真つ平ゴメンのはず。このお見

合いは形だけで終わる可能性が高い。とはいえ、気が重いことには違いがないが。

「はあ……」

もう何度目かもわからないため息をついて、百合子はシャワーを浴びるべく立ち上がった。

2

そして日曜日――

百合子はいやいやながらも、待ち合わせのシュートランホテルに来ていた。

気乗りのしないお見合いであつても、相手は自社の社長の息子だ。第一印象くらはよくしておこうと、百合子は普段のビジネススーツよりも華やかなセレモニースーツを着ていた。

オフホワイトの襟なしジャケットに、黒いウエストリボンがアクセントになっている。真珠のネックレスを合わせれば、綺麗目かつ、清楚な感じに纏まるのだ。

(ホテル内の展望レストランで待ち合わせよね)

このホテルは、海岸沿いに建っている。観光客に人気の高級リゾートホテルで、別館には結婚式場もある。百合子の自宅マンションから電車で二駅ほどと近いので、もちろん泊まったことはない。地上三十五階の展望レストランは、見事なオーシャンビューで人気だ。デートスポットとしても有名などころである。

一度くらいこのホテルから見える夜景を楽しんでみたいと思っていたが、まさかお見合いで訪れるとは思わなかった。しかも今は約束の時間である十一時の十分前。夜景なんか見えるわけもない。

ドアマンが開けてくれた扉を潜ってホテルに入る。

エントランスの天井には巨大なシャンデリアが煌めき、カラフルなモザイクタイルの壁を水が流れ落ちていくのが目を引く。色とりどりの花が活けてあり、計算され尽くした優雅な空間といった具合だ。

コートを脱いだ百合子がエレベーターに向かうと、そこには見覚えのある男の背中があつた。

「え？ 佐藤？」

驚いたついでに声をかける。振り返ったのは案の定、同僚の佐藤真だ。どうやら、エレベーターを待っているらしい。

お見合い相手と同姓同名の彼がこの場にいることになんとなく嫌な予感がしながらも、百合子は彼の隣に立った。

「こんなところで会うなんて偶然ね」

「よう、浅木」

ストライプ柄のイタリア製スーツをスマートに着こなした彼は、どこにいても人目を引く。背が高いというのもあるのだが、無駄に顔がいいのが主な原因だ。

彫りの深い二重の眼差しに、スツと通った鼻梁。落ち着いた茶色の髪を柔らかく後ろに撫で付けるその様は、生粋の日本人のくせにハーフに見える。爽やかな水色のシャツと濃いネイビーのネク

タイ、そしてジャケットに添えたポケットチーフも無造作なのにオシャレだ。手にしたコートも、フォーマルなチエスターフィールドコートというそのなさ。

このホテルは結婚式場もあるから、友達の結婚式にでも出席するのだろうか。もしかしたら、いつもと違う装いの自分も、式の参列者に見えているかもしれない。

こんなところで彼と会ったのは想定外だが、わざわざお見合いに来たことを言う必要はない。そんなことを言ったら、「三十路を前にして、結婚に必死になってるのかよ」と、からかわれそうだ。そんなの真つ平コメンである。

「今日はどうしたの？ 誰かの結婚式？」

どうせエレベーターを降りればそこで別れることになる。佐藤と一緒なのは短い時間のはずだ。いろいろと聞かれるよりも、先に聞いてしまったほうがいい。

無視するのも大人気なく思えて話をふると、佐藤はスラックスのポケットに片手を入れて、いつもと同じく軽い調子で答えてきた。

「いや？ 今から見合いする」

「お、お見合い!?」

まるで自分の予定を言い当てられたような気がして、ドキッと心臓が跳ねる。裏返った声で動揺する百合子に、佐藤はちょうど開いたエレベーターを視線で指した。

「乗らないのか？」

「の、乗るわよ」

動揺を抑えるように、ツンと顎を上げてエレベーターに乗り込む。

大丈夫、大丈夫。佐藤が自分の予定を言っただけで、百合子が今からお見合いすることがばれたわけではない。これだけ大きなホテルだ。実は人知れず、そこかしこでお見合いが行われているかもしれない。

百合子がそんな可能性を考えていると、佐藤がエレベーターのボタンを押した。

(ゲツ、佐藤も展望レストランに行くの!?)

これでは百合子がお見合いすることがばれてしまう。

佐藤もお見合いらしいが、いくら同じ年でも男と女では三十路の意味合いがだいぶ違う。しかし同時に、あるひとつの可能性が頭をよぎった。

(……いや、まさか……。まさか、ね……)

二人っきりのこの空間を息苦しく感じていると、彼はニヤリと口角を上げた。

「おまえも見合いだろ？」

ズバリ言い当てられて、百合子の眉が見る見るうちに寄っていく。

「な、なんでわかったのよ？」

会社でも誰にも話していないのに……

警戒を含んだ百合子の低い声に、佐藤は不機嫌な様子も見せず、むしろドヤ顔で自分の胸元を指差した。

「それは浅木の見合い相手が、なにを隠そうこの俺だから」

「……………」

今、この男はなんと言ったのか。

耳から聞こえた情報を脳が処理することを拒否しているかのように、理解に時間がかかる。まるでひと昔前のパソコンのようだ。

(私のお見合い相手が佐藤?)

「……え?」

たつぷりと時間を置いた百合子は、佐藤の長身をなぞるように、上から下まで視線を動かした。どこからどう見ても、毎日会社で会っている同僚の佐藤真だ。間違いようがない。

「佐藤、真……?」

「そう。俺」

「……」

意地の悪い笑みを浮かべた顔で頷かれて、百合子は一瞬、無言になった。

最悪だ。まさかの予想が当たってしまった。同姓同名だとばかり思っていたが、まさか本当に同僚の佐藤がお見合い相手だったなんて!

「ちよつとあんたねえ……。なにが社長の息子よ。釣書にウソ書いてんじゃないわよ! オシヤレして損したわ!」

他人を騙るなんて非常識にもほどがある。

母親は遠い親戚からの話だから大丈夫だと言っていたが、しっかり騙されているじゃないか。

気乗りしていなかったとはいえ、いつもよりもメイクに時間をかけたし、髪も綺麗に巻いただけ

あつて、腸が煮えくり返る思いだ。

佐藤が、まさかこんなことをする奴だとは思わなかった。

もし相手が百合子ではなくて、なにも知らない他所のお嬢さんだったらどうするつもりだったのか。少々自信過剰で鼻に付く同僚だが、悪い奴だとは思っていなかったのに——

「サイテー」

百合子がボソツと呟くと、佐藤が小さく肩を竦めた。

「なんだかえらい言われようだが、俺は嘘なんかひとつも書いてないぞ」

「ハア?」

百合子が訝しげに佐藤を見ると、彼はエレベーターの電光掲示板を見ながら、澄ました顔で言うのけた。

「俺、ライズイノベーションの社長の息子だからなあ。妹が一人いるけど、今のところ俺が親父の跡を継ぐことになってるし」

「え?」

百合子の瞼がくわつと持ち上がり、口もぼかんと開く。信じられなかった。

ずつと、ただの同僚だと思っていたのに。

「……………うそ……………」

「だから嘘じゃないって」

チン——と鐘の音が鳴って、エレベーターが止まる。機械音声と共に開いた鉄の扉から、やたらと眩い光が射し込んで佐藤を照らした。

彼は半身だけ振り返って、珍しく人好きのする笑みを向けてくる。

百合子の前ではいつも高慢で、得意げで、不敵に笑うくせに。

今日、彼の笑みがいつもと違って見えたのは、ここが職場ではないから？ それとも逆光のせい？

「立ち話もなんだ。来いよ。飯食おうぜ」

佐藤はそれだけを言っ、悠然とした足取りでレストランの中に入って行く。

どこか釈然としない思いを抱えながらも、百合子は彼のあとを追った。

案内された展望レストランは、お昼にはまだ少し早い時間だというのに、もうほとんどの席が埋まっている。カップルと女性グループの宝庫だ。噂には聞いていたが、やはり相当な人気店らしい。

既に佐藤の名前で予約されており、店内で一番眺めのいい席に案内される。

佐藤の向かいに座った百合子は、彼に胡乱な眼差しを向けた。

百合子の知っている佐藤は、自信家ではあるものの、嘘つきで信用のおけない人間ではない。彼に仕事で嘘をつかれたことは一度もない。

だから、まだ信じがたいことだけれど、彼が社長の息子というのは本当なのだろう。

今まで黙っていたのは、なにか理由があるのか。

「ねえ、なんで一般社員なんかやってるのよ」

佐藤はボーイの持つてきてくれたメニューを開きながら、百合子の質問になんてことのないように答えた。

「経験を積むためだ。下積みってやつだな。いやだろう？ 現場を知らない奴が上に立つの」

「そうね」

これには同意しかない。

企画を何案も出すのは頭の痛い作業だし、クライアントがいる以上、やはり時間的にも不規則で、納期のために残業することもある。

現場を知らない上の人間の気分ですらひとつで企画を白紙にされたら、やる気云々以前に仕事が回らない。

「うちだけじゃなくて、他でもよくやってることだ。後継を取引先に預けたり、海外で肩慣らしさせたり。うちは、自分とこの支店で勉強っただけだ」

「ふうん。大変なのね」

社長の息子だからといって、ぬくぬくできるわけではないのか。代替わりした途端に経営悪化や、業績不振なんかになるものなら、顧客も株主も役員も、そして社員だって黙ってはいない。そうなるかならないかは、跡継ぎの手腕ひとつだ。プレッシャーも半端ないだろう。

そう考えると、なかなか大変そうな立場だな、と同情すら覚えた百合子に、彼は話を続けた。

「俺の素性を知ってる奴、大阪支店には一人もいないからバラすなよ」

この口止めは同時に、今までの佐藤の企画が採用された経緯に、コネやごり押しがなかったことを意味している。

佐藤が社長の息子と知っていれば、支店のお偉いさん方も彼の案ばかりを採用するだろう。だが現実には、百合子の案も、他の社員の案も、いいものは分け隔てなく採用されているのだ。

佐藤の案の採用回数が多いのは、ただ彼が優れた企画を出しているだけ。

それは、幾度となく競って来た百合子が一番よくわかっている。

「ふうん、そう。私の口の堅さは信用してくれていいわよ」

そう言った百合子を、メニューから顔を上げた佐藤がじっと見つめてきた。

「おまえ、態度変わらないんだな」

「ん？」

意味を図りかねて首を傾げる。

すると佐藤は小さく肩を竦めてみせた。

「いや。俺が社長の息子だって知っても、おまえは態度がちつとも変わらないなと思ってな」

「そう？ 驚いたわよ？」

驚いたに決まっている。

佐藤と一緒に仕事をしてきたこの七年間、本当にただの同僚だと思っていたのだ。

彼が同期や後輩と一緒にいて、アドバイスや指導をしているところは見たことがあっても、支店のお偉いさん方とつるんでいるところなんか見たこともない。

そんな彼の普段の勤務態度から、この人が社長の息子であるか誰が考えるだろうか？

百合子の反応を前にして、佐藤は笑いながらメニューのページを捲った。

「あー、まあ、おまえはそういう奴だよなあ」

「……？ なにそれ」

聞いてみたが、佐藤はこれ以上教えてくれない。

諦めた百合子は、自分の目の前に置かれていたメニューを開いた。

この店はイタリアン風の創作料理を出すらしいが、載っている料理の名前はどれも独特だ。

コースを選んで更にそこから前菜、主菜に選択肢があるのだが、「ナポリ湾からの贈り物出石風」だの「メレンゲの気持ちを添えて」だの、なにが出てくるのかよくわからない。しかも、写真もないのだ。

「ねえ、ここ初めて来たんだけど、なにがおいしいの？」

百合子が尋ねると、佐藤はメニューから顔も上げずに「あー」と言った。

「そうだなあ。おまえが好きそうなものを俺が適当に注文しようか？」

「ああ、それいいわね。そうしてちょうだい」

佐藤の案に頷くと、彼は近くにいたボーイを呼び止めてメニューを細々と注文してくれた。

「食後のお飲み物はいかがなさいますか」

（あ、私、ホットミルクティーがいいな）

軽く手を上げて、飲み物の希望を出そうとしたとき、百合子よりも先に佐藤が口を開いた。

「コーヒート、ミルクティーを。両方ともホットで」  
迷わず注文した彼に驚いて、目を瞬く。

全部を注文してボーイが復唱してから、彼は百合子に「これでよかったか？」と聞いた。  
「ええ」

「じゃあ、それで」

「かしこまりました。それではお食事の用意をさせていただきます」

ボーイが一旦下がってから、百合子はわずかに身を乗り出した。

「ホットミルクティーは私に？」

「そうだよ。おまえ、食後はいつもそれじゃないか」

当たり前のように言われて、なんだか言葉に詰まる。

(確かにそうなんだけど……)

百合子は社員食堂でも外に食べに行っても、食後にはミルクティーを飲む。よほど暑い日はアイスにしたりもするが、基本的にホットだ。それを佐藤が知っているとは思わなかった。

「よく知ってたわね。私がミルクティー派だって」

「知ってるさ、それぐらい——何年見てたと思ってるんだよ……」

「え？ なに？」

後半がごによごとした小声でよく聞こえなかった。

百合子は聞き返したのだが、ボーイが戻ってきて、カトラリーセットをテーブルに並べはじめた

ために結局聞きそびれてしまった。

(なんて言ったのかしら?)

もう一度聞こうとも思ったのだが、なんとなくタイミングを失ってしまったのを感じる。

(まあ、いつか)

飲み物の好みなんてそんなに大事なことでないかと思いついて、百合子はおしぼりで手を拭きながら話を振った。

「佐藤もお見合いなんかするのね。意外だわ」

「まあな」

佐藤の返事は素っ気ない。

彼のプライベートや女性関係など今まで小耳にすら挟んだことはないが、案外彼も、断れずにここに来た口か。

「誰の紹介なの？」

「大学時代の友達の親父さん」

「ふうん」

つまりは、百合子の大伯母の旦那の兄の娘の旦那の息子、が佐藤の大学時代の友人なわけか。

世の中、全ての人は六人以内の仲介人数で繋がる事ができるという、六次の隔たりなる説があるが、それが自分たちの間にも起こったことになる。

「不思議なご縁ねえ……」



百合子がしみじみとそう呟いたところで、ボーイがかりで前菜を運んできた。チコリをボードに見立てているのか、中に海老、アボカドが乗っている。横にはひと口サイズのパイが添えてあった。

「おいしそうね」

「たぶん、浅木はこのソース好きだと思う」

佐藤の言葉に期待が膨らむ。

クリーミーなソースが川の流れのように美しく描かれていて、そのソースにパイを付けて食べるようだ。口に含むと優しい甘みで、思わず声もれた。

「おいしーっ」

「だろ？」

心なしか佐藤の表情が綻んでいるように見える。彼はフォークとナイフを使って綺麗に食べながら、「そっついえば」と話した。

「金曜にさ、クライアントから電話があったんだ。ほら、あのレストランのとな」

「アドネ・オルランドシェフの？」

百合子が佐藤に負けた企画だ。

佐藤は頷きつつ、話を続ける。

「そう。俺の企画は全体的に気に入ってくれたらしいんだが、向こうの社内会議で立地のことが議題に上がったっぼくてなあ……もしかすると月曜の朝イチで、またなにか言ってくるかもしれない」

企画が通って正式受注しても、その後変更や修正がかかるのはよくあることだ。それが微調整の範囲ならまだいいが、やっかいなのは予算が変動するほど大規模な変更。

ひどいときなど、まるつきり別物になる場合もある。そして予算は当初のまま。

こちらとしても当初の予定通りに万事が進むとは思っていないし、変更ありきだと覚悟はしている。しかし、大規模な変更は企画泣かせだといえるだろう。

「あら、お気の毒様」

しれっとそう言った百合子に、佐藤は苦笑いを浮かべて眉を上げた。

「今、絶対自分の企画が通らなくてよかったと思っただろ」

「ふふ。そんなことないわよ。でもまあ、佐藤のことだからうまくやるんでしょ？」

佐藤が現場で慌てているところなんて見たことない。どんなにやっかいなことが起こっても、彼はなんでもないように対応するのだろう。そして彼には、その自信があるのだ。

「まあな」

案の定、ニヤリとした佐藤を、百合子は「フン」と鼻で笑った。

「ピンチになってどうしようもなくなったら、助けてあげないこともないわよ？」

立地の選定に関しては、百合子の案のほうがよかった自負がある。クライアントもそれはわかっているはずだ。

社内コンペでは佐藤が勝ったが、もしかするとそれを覆す結果が待っているかもしれない。

挑発気味に目を細めると、佐藤は顎に手を当てて眉を上げた。

「へえ？ 助けてくれるんだ？」

「いいわよお？ その代わり、他の案件でまた有名人が出てきたら、私にあんたのツテを使わせなさいよ。どうせなんか繋がりがあるんでしょ？」

社長の知り合いは社長。社長の息子の知り合いもまた、推して知るべし。イタリア人シェフ、アドネ・オルランドに直接連絡を取ったようなツテが他にもあるかもしれない。佐藤にあつて百合子にないもの——それは著名人とのコネクションだ。

佐藤が紹介してくれば、自分と彼との差を埋めることができるはず。

(まあ、そう簡単に佐藤が自分のツテを使わせるとは思えないけどね)

人脈は一種の財産だ。信用している相手でない、紹介なんかできない。「どうしてこんな奴を紹介したんだ」と相手側に思われては、自分との繋がりも切られてしまう可能性だってある。

ましてや佐藤は社長の息子だ。百合子とは立場が違う。だからこれは、とりあえずふっかけてみただけというのが正しい。

しかし——

「いいぞ」

あつさりと頷いた彼に、百合子は驚いた。てっきり、「そんなことはできない」と、断られると思っていたのに。

「え、いいの？」

「浅木だからな。俺の顔に泥を塗るとも思えないし。いい仕事するだろう。むしろ俺の株が上がる」

「……」

そんなふうと思うのか、彼は。

彼の自分に対する評価を垣間見て、なんだかこそばゆい気持ちだ。

「あ、ありがと」

ぼそぼそっとお礼を言う百合子を、軽く頬杖を突いた佐藤が見る。

「いやいや。俺が世話になるほうが先かもしれんぞ？」

「そのときはちゃんと手を貸すわよ」

当然だ。こういうものは、お互いウィンウィンな関係にしてこそだろう。そして恨みっこナシで、自分が勝てばなお気分がいい。

言い切った百合子を前に、彼は小気味よく笑った。

「ああ、期待してるよ」

それからも仕事の話が続け、食事は気楽な調子で進んだ。デザートが出てきたところで、百合子は食後のミルクティーを飲みながら佐藤に尋ねた。

「これからどうするの？」

いやいや来たお見合いだったが、相手は見知った佐藤だ。これはもうお見合いというより、ただ同僚と鉢合わせしてついでに食事をしたようなものではないか。お見合いの体をなしていない。

佐藤のほうは百合子が来ることを知っていたようだが、どうせ彼のことだ、驚かせようと黙っていたんだろう。実際、百合子は二重の意味で驚いた。

(まさか佐藤が社長の息子とはね……世の中わからないものだわ)

百合子がそんなことを考えていると、コーヒーを飲んでいた佐藤がカップを置きつつ「そうだなあ」と独りごちた。

「そういや、俺の十勝祝いは？」

まだそれを引つ張るのか。

「じゃあ、ここは私が奢るわ」

結構いい食事だったから、お祝いにはちょうどいいだろう。そう思つて提案したのだが、彼は首を横に振った。

「いや、他のがいいかな」

なんですと。

しかし、当の本人がそう言うのなら、ごり押しする百合子ではない。

「あら、そう。ならここは割り勘ね」

「いい。もう払ったから」

「ええ？ いつの間に……」

驚いた百合子に彼は「おまえがデザートに夢中になつてゐる間に」と、なんでもないように言う。(なによそれ。スマートすぎるじゃないのよ、佐藤の奴)

奢ろうと思つていた相手に、知らぬ間に奢られていたなんて。ちょっとどころかだいふ困惑してしまう。しかもこの佐藤の手際の上さと言つたら……

(だいふ女慣れしてるわね)

佐藤だつて今年で三十になる大人の男だ。それなりに経験があることだろう。

百合子はデザートのレストランひと口を頬ばった。

「じゃあ、十勝祝いは奮発してあげる」

それでチャラだ。借りを作るのは好きじゃない。

すると、わずかに身を乗り出した佐藤がニヤリと意味深に笑つた。その笑みはなにかを企んでい(たくら)るようにも見えるし、希望が叶つて喜んでいるようにも見える。

(佐藤め。よっぽど高いものが欲しいのかしら)

それなら自分で買えばいいようなものかと思ひながらも、決して安くはないこの食事代をぼんと払うくらいの佐藤だ。きっと、百合子に買わせることが目的なんだろう。

別に、それならそれでかまわない。今度有名人が絡む案件が来たときは、彼のツテを使わせてもらえろのだから。

「そうと決まれば、このあと付き合つてくれよ。いろいろ見て選びたいしな」

「いいわよ」

元から百合子には予定なんてない。早めに帰つたところで、せいぜい部屋の掃除をするくらいなものだ。暇つぶしにはちょうどいい。

ホテルのレストランを出て、二人で駅近くにある繁華街へ向かった。

もう十一月。おろしたての冬物コートが絶賛活躍中だ。

ただ、こうして佐藤と並んで歩いていると、どうにもまわりの視線が気になる。

「ねえねえ、見てあの人。超カッコいい」

「ほんとだ。イケメン。背、高い。隣の人、彼女かな？」

「じゃない？ いいなー。私もイケメンの彼氏欲しー」

軽く聞こえてくる会話もこんな調子だ。チラチラと向けられる視線も好奇心まじりのもので、どれもこれも百合子と佐藤をカップルだと誤解している。

（私はこの人の彼女とかじゃないんですけど……）

胸中で否定しても、誰にも聞こえやしない。

今まで仕事中に彼と二人で出歩いても、こんなにまわりの視線が気になったことはない。

今日が休日だから？ それとも、お互いにコートの下が、いつものビジネススーツではないから？

百合子がまわりの視線ばかりを気にしていたとき、佐藤が足をとめた。

「なあ、この店見ていいか？」

そう言った彼が指差しているのは、ビジネスカジュアルスタイルを展開しているスーツ専門店だ。老舗しほスーツメーカーが若者向けに展開していて、品質が高いと評判の店である。

佐藤のスーツはオーダーメイドのようだが、小物はこういう店で揃えているのかもしれない。

「いいわよ」

二人で中に入ると、「いらっしやいませ」と若い店員の声で出迎えられる。新装オープンのセル中らしく、人が多い。リクルートスーツコーナーは、特に賑にぎわっていた。

「なにが見たいの？ ネクタイ？」

店内を眺めながら聞いてみる。佐藤は「そうだなあ」と顎あごに手を当てていた。

「特に困っちゃいないんだよなあ」

「じゃあ、なにしに来たのよ」

思わず突っ込む。だが彼は、商品を眺めながらしれつと言うのだ。

「欲しいと思えるものを探しに」

「なによそれ……まったく……」

だが、ウインドウショッピングをしているうちに欲しくなるということもある。

ぶらりと店内を回っていると、レディースのカジュアルニットが百合子の目に入った。

（あら、ここはレディースも取り扱っているのね。ふうん？ いいじゃない、これ）

オンでもオフでもマルチに使えて、これからの季節にうってつけだ。

トレンドを押さえたケーブル編みの白いセーターはシンプルだが、一枚持っていると便利だろう。手に取ってみると、肌触りもいい。軽くて滑なめらかで、ちくちくしないし、引っかけりも感じない。

遠目ではわからない程度に、肩の部分にレースのデザインが施ほどこされているのもいい。

「それ気に入ったのか？」

急に佐藤に声をかけられ、我に返る。彼のものを見に来たのに、ちゃっかり自分の服を見ていたことばつが悪くなり、百合子は軽く肩を竦すくめた。

「ん〜まあ、ちょっといいかなあと思っただけ」

「ふーん？ 着てみればいいのに。似合いそうだぞ」

まさか佐藤にそんなことを言われるとは思っていなくて、キョトンと目を瞬またたかせる。すると今度は、彼のほうが首を傾げた。

「なんか変なこと言ったか？」

「い、いや、そうじゃないけど……」

「ん？」

佐藤は百合子が見ていた白いセーターをハンガーラックから取って、百合子の肩に押し付けてきた。

「ほら、そこに鏡あるから見てみるよ。絶対似合うから」

言われるがまま、鏡の前でセーターを胸に当てる。サイズもぴったりだ。

「ほらな。やっぱり似合う」

「そ、そう？」

改めて鏡を覗くと、自分でもなんだか似合っている気がする。

(どうしよう。買っちゃおうかなあ……)

鏡の前で何度も胸にセーターを当てては外しを繰り返して、眉を寄せて悩む。

衝動的しんどうてきすぎるような気もするが、今買っておかないと売り切れてしまうような不安も感じる。

悩みに悩んでいると、鏡越しに佐藤の顔が見えた。

彼は、鏡を覗く百合子の後ろ姿を目を細めて眺めている。まるで、ほほえましいと言わんばかり

のそれは、百合子が知っている彼の表情のどれとも違う。

もっと柔らかくて優しいもの。しかしその裏に強くて熱いなにかを感じる。

そんな視線が自分に向けられていることに気付いた途端、百合子はセーターをもとのハンガーラックに戻っていた。

「やっぱりやめとく」

「そうか？ 結構似合ってたんだけどな。気に入らなかつたのか？」

そうじゃない。セーターは気に入った。むしろ原因は佐藤だ。

(……な、なんであんな目で私を見るのよ……)

落ち着かない。なんだか身体の内側を羽毛で触られたかのようにこそばゆい。あの熱っぽさはなんだ？

不快ではなく、ただただくすぐったくて落ち着かない。自分でもわからないままに、なんだかこの場から逃げ出したくなっていた。

あんな目で見つめないでほしい……あの視線はまるで、そう――

「じゃあ、違う色とか試してみるか？ この色も似合いそうだぞ」

佐藤はそんなことを言いながら、さっきのとは色違いのセーターを手に取って勧めてくる。それを受け取らずに、百合子はフィツとそっぽを向いた。

佐藤の目を正面から見られない。

「わ、私のはいいわよ。佐藤は自分のを見なさいよ。あんたが見たいって言ったんだから」

ぶつきらぼうにそう言つてやると、佐藤はぐるりと店内を見渡して百合子に向き直つた。

「よし。じゃあ、次の店に行こう」

「え？」

一瞬反応が遅れた。そんな百合子の手を佐藤がぎゅつと掴んでくる。

「ほら、行くぞ！」

「え？ ええ？ さ、佐藤！ 佐藤ちよつと！」

手を引かれるままに、彼のあとを追う。そのときに、繋がれた手が目に入って、百合子の顔にふわっと熱が上がつた。

（~~~~っ！）

どうして自分が佐藤と手を繋ぐなくてはいけないのか。そんな理由なんてないはずなのに、彼はこの手を離してくれない。離してくれないから、指先からどんどん熱くなってしまう。

「ちよ、ちよつと佐藤！」

耐えられなくなつた百合子の声が大きくなる。

しかし彼は、平然と百合子の手を掴んだまま――

「ここ、前からちよつと気になつてたんだよな。付き合えよ」

そう言つて彼が入つたのは、時計専門店だ。腕時計が並ぶショーケースの前に来たところで、佐藤はようやく百合子の手を離した。

「そろそろ腕時計変えたいなつて思つてるんだけど、どんなのがいいと思う？」

佐藤は、ショーケースをひと通り眺めながらそんなことを言う。

「し、知らないわよ！ そんなの！」

（なんなのよ、もう……）

苦々しい思いで佐藤の横顔を見やる。彼は百合子の動揺など気付いてもいないのだろう。顔を上げるなり、心底同情的な眼差しを向けてきた。

「おまえ、今まで男の時計すら選ぶ機会なかつたのかよ。ホント残念な奴だなあ……」

「なんですつて？」

カチンときた。

これはなにか？ 暗あんに、百合子がモテないと言いたいのか？

確かにモテないのは事実だし、男性経験だつて七年前に別れた元彼一人だけだ。この年になるまで仕事しかしてこなかつたことは認めるが、残念な奴呼ばわりされては黙つていられない。自分のセンスにケチをつけられた気分だ。

百合子は鼻息荒くショーケースに齧かり付いた。

「時計くらい選べるわよ！」

（馬鹿にするんじゃないわよ！）

男物の腕時計なんて選んだことはないが、ようはスーツに合う無難なものを選べばいいのだろう。奇抜なデザインのもの避け、アナログ時計の中から選べばそう外れはしないはず……

まるで宝石のように綺麗に並べられた時計を見ながら、佐藤が普段着ているスーツとのバランス

を考える。

(佐藤は結構いいもの着てるから、時計だけチープだとすごく変よね。年齢と立場からしても、ワ  
ンランク上を持つても全然おかしくないけど、かといって、あまりにゴテゴテしたものは一歩間違  
えるとおじさんっぽいし……えー、佐藤は普段どんな時計してたっけ？ 文字盤は白だった？ ど  
うだったかしら？)

念入りに吟味した末に百合子が選んだのは、アナログの自動巻きタイプ。ステンレススチールの  
バンドで、黒の文字盤がシックでスーツに合うはずだ。

「これはどう？」

ショーケース越しに指差すと、横から佐藤が覗き込んできた。そのときに、トンと肩が触れあつ  
て、なんだか胸の内がざわざわしてくる。整髪料か香水か、男らしくてどこかセクシャルな匂いが  
鼻孔をくすぐった。

こんなに至近距離に彼が来るのは初めてで――

「へえ、ハミルトンか。いいところ選んできたな」

息がかかるほど近い距離で聞こえた声に、ビクッと肩が揺れる。途端に速くなった心音を誤魔化  
すように、百合子はツンとそっぽを向いた。

「ロレックスのほうがよかった？」

男物の時計に興味のない百合子が知っているメーカーなんて、ロレックスとオメガくらいだ。と  
りあえず知った名前を出してみると、佐藤がショーケースから顔を上げた。

「いや？ ロレックスはもう持つてるからいい。つてか、今つけてるじゃん？ だから違うメー  
カーから選んだんじゃないのか？」

佐藤がジャケットの袖を少し上げて、腕時計を見せてくる。美しいブルーの文字盤に書かれた  
ROLEXの文字に、百合子はますますそっぽを向いた。

(知らないわよ！ 見えないわよ、そんなちっちゃな文字！)

時計オタクじゃあるまいし、パッと見ただけでそんなところまで気付くはずがない。

否定も肯定もしない百合子の態度を佐藤がどう思ったのかは知らないが、彼はショーケース内の  
ハミルトンを見ながらふんふんと頷いている。

「いい時計だ。普段使いにちょうどよさそうだ」

「気に入ったの？」

ならもうそれを買ってやるから、さっさと解放してほしい。百合子はそんな気持ちで、自分の選  
んだ時計の前に置かれている値札に目をやった。

(じゅうさんまんなせんひやくろくじゅうえんんん!?)

ギョツとして目玉が飛び出そうになる。

とにかく佐藤に似合うものと思って選んでいたから、値段なんか見ていなかった。いや、いい  
年のメンズの腕時計としては無難な値段なのかもしれないが……同僚へのプレゼントとしては、値  
が張りすぎではないだろうか。

(ぐっ……!)

しかし、これを選んだのは百合子だ。十勝祝いだというのもわかっていた。プライドのお陰で、今更引くに引けない。諭吉の束にバイバイする決心をつけて血の涙を飲もうとしたとき、佐藤がくるつと踵を返した。

「まあ、こういうのがあるというのはわかった。候補に入れておこう」

彼はそれだけを言うと、飄々と店を出る。

「ちょっと、買わなくてよかったの？」

「ああ。今はいい」

もしかして、そこまで気に入ったわけではないのだろうか。それとも、値段を気にしたのか。理由はわからなかったが、彼のあとを追いかける。

「あー。なんか疲れたな。どこか入って休憩しよう」

（まったく……この男は……）

佐藤が気まぐれな性格なのは知っていたが、ずいぶんと好き勝手なことを言ってくれる。彼に振り回されているのを感じていると、突然、彼が立ち止まった。

「なあ、あの俳優と俺、なんとなく似てないか？」

彼が指差しているのは、映画館前に貼ってあった映画のポスターだ。公開前だというのに早くも話題になっている映画で、百合子も観たいと思っていた。

超人氣俳優と自分が似ているなんて、なんて高慢な男なんだろう。確かにちょっと鼻が高くて、目が二重なところなんか似ていないことはないが、それを認めるのは癪に障る。彼のことで、絶対

調子に乗るに違いないのだから。

「そうね。目とか、鼻とか、口とか、顔の全体的なパーツの数がまったく同じで、超そっくりだわ。カッコいいわよ」

フンと鼻で笑って言ってやる。すると佐藤は噴き出すように笑いながら、百合子の顔を指差した。

「おまえもヒロインの女優と顔のパーツの数が同じで超美人だぜ」

「ありがとう。自分で言うのもなんだけど、ちょっと似てると思っていたのよ」

お互いに茶化しあって、少し肩の力が抜ける。

柄にもないことだが、佐藤相手に緊張していたようだ。

（実は社長の息子ですって聞いたら、そりゃあ、ね？）

でもホテルでそれを聞いたとき、本当に自分は緊張してただろうか？ 驚きはしたが、それだけ

だったような……？

（まあいいわ。そんなこと）

気を取り直した百合子は、佐藤がおすすめだという喫茶店に入って、本日二度目のホットミルクティーを注文した。

「ここがうちよ」



もうすっかり日が暮れてから、百合子は佐藤に送られて自宅マンションに帰ってきた。

「この辺暗いな。部屋まで送る」

百合子としては別にマンション前でよかったのだが。佐藤はタクシーの運転手に戻ってくるまで待つように言って、わざわざ車から降りてきた。

「今日は付き合ってくれてありがとうだな」

エレベーターの中で佐藤が、ふとそんなことを言ってきた。

あのあと喫茶店を出てから、気まぐれな彼にまた連れ回され、靴専門店やら、靴屋やらに、目に付くままにぶらりと入った。だが結局なにも買っていない。見て回っただけだ。

「あれだけ回って欲しいもののひとつも見つからなかったの？」

彼が興味らしい興味を示したのは、ハミルトンの腕時計だけだ。だがそれも購入には至らなかった。

(きつと、いろいろいいものを持つてるから目が肥えてるのね)

部屋のある五階に着いて、エレベーターを降りる。

一番奥の角部屋が百合子の部屋だ。そちらに向かって歩いてみると、後ろから着いてきていた佐藤が、なんてことのないように言った。

「いや？ さすがに欲しいものは見つかったよ。今日一日見ていて思ったんだが、やっぱりいいなって、確信持った」

「ふーん、そうなの？ で、なにが欲しかったの？」

今日一緒に見て回った中に彼が気に入ったものがあつたのなら、聞くだけ聞いておいて、今度一人で買いに行けばいい。まあサプライズというやつだ。十勝祝いにそれぐらいしてやってもいいかもしれない。そんなことを考えながら、部屋の前で鍵を出そうと鞆を探る。そのとき――

「浅木が欲しい」

「っ!？」

甘みを帯びた囁きに驚いて振り返ると、思わずぶりに笑う佐藤と目が合った。

彼の笑顔を読めない。なにを考えているのかさっぱりわからないのだ。

「ば、馬鹿馬鹿しい」

突然なにを言いだすのか、この男は。

これはジョークか？ ジョークなのか!? ほんのちよつとドキドキしちゃったじゃないか!!

そんな百合子の頭のすぐ横に、ドンという重たい音と共に佐藤の左腕が置かれた。これはいわゆる、壁ドンというやつ?

「馬鹿馬鹿しくはないだろ。俺たちは今日、見合いしてたんだけど？ その意味、わかつてるのか？」

ふつと笑みを消した佐藤は、百合子に真剣な眼差しを向けてくる。さっきまでの飄々とした雰囲気が消え去った彼に、百合子の目が徐々に見開いていった。

(え？ お、お見合い!?)

いや、わかっている。お見合いだ。

今日、シュートランホテルに行ったのはお見合いのためだ。しかし、お見合い相手が見知った佐藤だったことで、百合子の中ではもう、このお見合いは名目だけのものになっていた。

現に、お見合いにありがちな「ご趣味は？」なんて会話はひとつもしていない。お互いにもう、仕事を通してよく知っている相手だから。

なのに――

「この見合い、俺は結婚前提で進めるからそのつもりでいろよ」

(……けっ、こん……?)

それは自分と最も縁遠かった言葉。

完全に硬直している百合子の顎を、佐藤は右手でそっと持ち上げた。そしてなにも言わずに唇を重ねる。

あまりにも自然で、あまりにも当たり前前に合わさったそれに、百合子は自分がキスされているとしばらく気付けなかった。

そんな百合子の唇の合わせ目を、佐藤の尖った舌先がフーッとなぞる。まるで誘うようなその動きに、身体の内側にカッと熱が昇ったのは一瞬。その熱を理性で無理やり押さえ込んで佐藤の胸をドンツと押すと、百合子は正面から彼を睨み付けた。

困惑も動揺も、表には出さない。キスくらいで狼狽えるなんて、百合子のプライドが許さない。この男の前にすれば尚更だ。

「なにするのよ」

警戒と怒りの滲んだ低い百合子の声にも、佐藤は平然としている。百合子の反応なんか想定の内だと言わんばかりに、彼は自分が舐めて濡らした百合子の唇を、親指で拭いた。

「別に？ 婚約者におやすみのキスをしただけだよ」

婚約者!?

百合子はお見合いの席には行ったが、婚約の了承なんてしていない。なのに佐藤は、一人で勝手に決めてかかっている。

百合子は自分のものだと――

「馬鹿鹿じゃないの？」

思いっきり吐き捨てると、百合子は素早く玄関を開けて中に入った。

ガチャン！ と、遠慮なく音を立てて、鍵とチェーンをかける。

「浅木、また明日な」

玄関ドアの向こうから佐藤の声がして、その直後、去っていく彼の足音がした。

トクン、トクン、トクン、トク、トク、トクトク、トトトトト――

まるで列車が加速していくように心臓がけたたましく音を立てて、身体のご真ん中で暴れている。玄関ドアに凭れながら、百合子は鞆を持ったままの両手で、ガバツと頭を抱えた。

(え？ ええッ?? い、今のなに？ キス……?)

そう、あれは確かにキスだった。

佐藤が、あの佐藤が自分にキスをしてきた。